

●海外における医療・検査事情

北ベトナムの農村地域における獣医療の改善

Improvement of Veterinary Services in Rural Area of Northern Vietnam



お がわ たかし かなめ だ まさ はる
 小 河 孝¹⁾：要 田 正 治²⁾
 Takashi OGAWA Masaharu KANAMEDA

はじめに

筆者らは、2000年3月～2005年2月末までの5年間、JICAのベトナム国立獣医学研究所（National Institute of Veterinary Research : NIVR）強化プロジェクトの長期専門家として、NIVRにおいて家畜疾病の診断技術の改善、疫学調査および診断技術の普及・研修業務に従事してきました。

とくに、NIVRが研究機関としての総合的な自立発展ができるため、まず基本的な研究設備と環境を整えると同時に、プロジェクトの運営能力向上に留意しながら活動を推進してきました。

プロジェクト活動の柱は、診断技術改善、疫学調査および研修普及に関与するワーキンググループ（WG）の確立と同時に、研究の日常業務の維持・管理に必要なセミバリアー実験動物施設の維持管理、実験室の供用機材と共通ラボの運営管理、変電設備の拡充、蒸留水管理などのWG活動を含んでいました。これらの活動は、定期的にPMU（プロジェクト運営管理部）によってモニタリングされ、年毎に総括が実施されました。

プロジェクトの5年間の活動は、大きな成果を上げることができた部分と同時に将来への課題を提起するものまで多岐にわたっており、本稿ではその一部を紹介します。

NIVRは、1969年に創設され、これまでは家畜伝染病の診断研究を主体にしてきました。しかし、

1990年代後半に入り、ベトナム政府は酪農振興策に着手しましたが、その内容は輸入乳牛による増頭計画が主体で、総合的な酪農技術向上にはほど遠い状態でした。とくに、酪農衛生、乳牛の繁殖障害防除対策の必要性和重要性の調査研究は、NIVRで課題に上ることもなく、野外で問題が浮上してもまったく手付かずの状態でした。

そこで、プロジェクトが、2002年3月から北ベトナムのハタイ省バビ郡の農村地域で展開した「獣医員（獣医・家畜衛生技術者）の技能向上研修」の取り組みと成果について述べ、ベトナムの農村地域における獣医療の現状の一端を明らかにしたいと思います。

また、2004年始めからベトナム全土を席卷したトリインフルエンザ大流行の状況についても若干ふれておきます。

I. 獣医員研修の準備過程

2001年3月から、以下のような具体的な準備を開始しました。

1. 2001年3月、「農村地域にどのような家畜衛生問題があるか」を掘り起こし、解決の方策を探るために、ベトナム北部31省の獣医支局の家畜衛生行政担当者を集めたワークショップ（WS）をNIVRで開催しました。
2. 家畜疾病診断の技術普及と同時に、講習会の教材としても使用することができるベトナム語版「疾

1) 日本獣医畜産大学獣医学部獣医保健看護学科
 ☎180-8602 東京都武蔵野市境南町1-7-1

2) 国際協力機構（JICA）国際協力総合研修所
 ☎162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5

1) *Nippon Veterinary and Animal Science University*
 (1-7-1, Kyonan-cho, Musashino-shi, Tokyo)

2) *The Institute for International Cooperation, Japan International Cooperation Agency*
 (10-5, Ichigaya Honmura-cho, Shinjuku-ku, Tokyo)

病カラーアトラス」、「家畜疾病診断マニュアル」などを先行的に翻訳出版しました（写真1）。



写真1 翻訳出版したベトナム語版資料の数々

3. 2001年6月、獣医師研修を具体的に担当する研修普及WGの主要メンバーに対して、ベトナム南部のカントー大学の農村・農業普及活動の専門家を招聘し、12日間の「トレーナーズ・トレーニング」(TOT)の指導者養成研修を実施しました。とくに、「参加型研修」という効果的な研修手法の習得は、NIVRにおいてはじめてのことであり、たいへん重要な意義がありました。

4. 2001年11～12月、ハノイ周辺の数省を具体的に調査し、研修効果が発揮されやすい地域の選定に着手しました。その結果、ハタイ省バビ郡（ハノイから北西50kmの地域）を酪農振興の支援と獣医師研修のニーズの高い場所として研修サイトに選定しました。

Ⅱ. 研修の具体的な取り組みと成果

1. 2002年3月、ハタイ省バビ郡内の4カ所（主に集会所）が研修（講義と実習を含む）場所として適切かどうか事前調査する目的で、予備研修で試行しました（写真2）。

2. 受講者は、バビ郡獣医事務所（ハタイ省獣医支局の下部組織）とバビ郡人民委員会（省人民委員会の下部組織、日本の村役場と考えてよい）が希望者を募って選定しました。結果的に140名もの多数になってしまいました。

3. 本研修は同年4月から、2カ月に1回、郡内4カ所で同一研修を4日実施する形で開始し、2003年8



写真2 予備研修での一場面

月まで計10回実施しました（写真3）。具体的な講義と実習カリキュラムはNIVRの研修普及WGが作成し、2カ月ごとの研修終了時には講師団が、研修内容の総括を行い問題点と成果を把握し、次回に備える形にしました。

4. 2002年9月、プロジェクトはハタイ省人民委員会（日本の県庁に相当）との間で「業務協定」を締結し（写真4）、外部条件といえる実施環境を整えました。この結果、バビ郡において、研修活動のみならず、疫学調査活動が自由に実施できたことは、野外におけるプロジェクト活動を前進させる上で大きな成果でした。

5. 2003年9月、獣医師研修の終了・閉講式（写真5）が盛大に開催され、134名の獣医師にプロジェクトとNIVRから終了証が交付されました。本研修の終了前は、研修到達度を判定する試験が実施され、研修普及WGによる総合判定会議が行われて合格者が決定されました。

6. 134名の研修終了者に、獣医師としての活動を支援する機材が整ったかばんが一人10万ドンの研修参加費と引き換えで支給されました。この参加費は次項で述べる「バビ郡獣医クラブ」の活動資金の一部として活用されることになりました。

7. 研修終了時にハタイ省人民委員会からプロジェクトに対し感謝状が贈られました。これは、本研修がベトナムの農村地域における技術研修普及活動として高い評価を受けた結果だと考えられます。また、研修期間中、他の外国NGOをはじめとする研修関係者による現場視察が数多く行われました。



写真3 本研修での講義と実習



写真4 ハタイ省人民委員会との業務協定を締結した



写真5 獣医員研修の終了・閉講式

Ⅲ. 研修終了後のフォローアップ活動

1. 2002～2003年にかけて獣医員研修に並行して、臨床疫学の短期専門家（臨床獣医師）がバビ郡に長期間2回投入されました。その結果、酪農振興地域

における問題点（乳牛繁殖障害の疾病分布状況）が具体的に明らかにされました（写真6）。

2. そのためバビ郡地域における乳牛疾病（障害）の治療・防除には、獣医療の技術向上が必要不可欠であり、とくに獣医員の先進部分に対して「臨床獣医療」技術を高める重要性が考えられました。第4



写真6 研修終了後にもフォローアップを行っている

胃変位、蹄病などを的確に診断・治療できる臨床技術を教えることは、技術の質的普及の意味でも重要なことと考えられます。

3. 獣医員研修終了後の「地域活動をどのように発展させるか」など、実情とニーズについて、ベトナムのローカルコンサルタントを活用して、「活動評価」実施しました。

4. その結果、研修を受けた獣医員自身が自らの技術力量を向上させ、勉強会（症例検討会）や関係者の支援を仰ぐなど組織的活動を展開するためには、「バビ郡獣医員クラブ」の設立が必要との認識に到達し、2004年2月、数回の準備会を経て本クラブが設立されました。

5. 先の研修参加費は、乳牛の第1胃内に入れて、金属片などの異物による創傷を防除する「磁石」の購入費に使われ、組織活動の運営（回転）資金として、有効活用されることになりました。

6. 研修終了後、プロジェクトは2カ月に1回の割合で「バビ郡獣医員 NEWSLETTER」を計6回発行しました。プロジェクト終了後、それが獣医員クラブ自らの力で発行できるために、ノウハウとパソコ

ンなどの資材支援を行いました。

Ⅳ. ベトナムにおけるトリインフルエンザの大流行と現状

2003年秋頃から東南アジアのタイ、ベトナムを中心に高病原性トリインフルエンザ（H5N1型）の発生が始まりました。ベトナムでは、2003年12月～2004年3月（第1波）まで、ニワトリ、アヒル、ガチョウ、ウズラなどの飼養農家に甚大な被害を及ぼし、死亡・殺処分羽数は4,390万羽（家禽飼養羽数の約17%）に達しました。またヒトの感染者は23名（うち死亡16名）で、発生地域は全国64省中57省でした。

ベトナム政府は2004年4月、いったん本病の終息宣言を出しましたが、実際には流行が再燃し、2004年4～11月（第2波）までに、ニワトリ、アヒル、ウズラなど80万羽が死亡・殺処分されました。ヒトの感染者は4名（死亡4名）でした。

第3波（2004年12月～2005年5月頃？）は、家禽の死亡・殺処分羽数は180万羽、ヒトの感染者は51名（うち死亡18名）で、発生地域は35省におよびました。

おわりに

第3波の流行では、とくにヒトの感染・死亡者数の増加が認められます。これは、ヒトに大流行を引き起こす変異ウイルス出現が懸念されますが、現在までヒトからヒトへの感染は確認されていません。また、昨年（2005年）の第2波以降、感染しても発症・死亡せずキャリアになるアヒルの存在が認められ、流行形態がepidemicからendemicに移行し、本病の常在化が懸念されます。